

おがさちいき ようすいぐん 小笠地域かんがい用水群

～水路とため池、隧道で紡ぐ水のネットワーク～

小笠地域かんがい用水群は、大河川が無く旱魃被害が多発していた地域に、農民の手により築かれたか も ようすい じゅうないり加茂用水、みねだようすい十内坳、みねだようすい嶺田用水と地域を代表する7箇所のため池の、合わせて10施設の用水群である。

これらは、わずかな高低差を見極め遠方から水を引く水路とともに、川を渡る木製函渠や石造り暗渠や、上下流で連続するため池、山を越えため池とため池をつなぐ隧道など、時代ごとの革新的で多様な技術を用いて、水源やかんがい区域を連続させるネットワークを形成した。

まず、16世紀末から17世紀には、3つの用水路が拓かれた。加茂用水は1594年に作られた8kmの水路で、5つの村の水田を潤した。その途中には、木製のたつどい龍樋と呼ばれる伏越工が施された。また、十内坳(掛川市指定文化財)は、1646年に天井川の川底と高さ6mの堤防の下を通すために、石柱で組んだ70mの埋樋で、100haの水田を潤した。さらに、嶺田用水は1625年に作られた4kmの水路で、250haの水田を潤した。3つの用水の開発者は、いずれも水神や仏として祀られ、地域の人々は供養を欠かさない。

続いて、主に17～18世紀には、水源の確保のため、おおいけ大池、ななまがりいけ七曲池、たが いけ田ヶ池、いぬまいけ居沼池など700か所を超えるため池が築かれた。そのうち、おくやまかみいけ奥山上池・なかいけ中池・しもいけ下池など、山間部の谷に堤を段々に築いた連続したため池が多く作られた。この連珠式ため池は、水量を確保しつつ、破堤の危険度を低減した。このようなため池の築造法等は、本地域で成立した日本で最も古い体系的な農業技術書である『ひやくしやうでんき百姓伝記』に記され、写本により全国に普及した。

さらに、18～19世紀にかけて、複数のため池を水路トンネルや開水路で連結し、安定した水の供給機能を向上した。やはた八幡池では、1760年に延長2kmに及ぶ沼地を渡る水路により他のため池の受益地と連結した。やだ おおいけ谷田大池は、1896年に別の谷のため池と幅1.0m、高さ1.3m、延長300mの導水トンネルで結ばれ、集水面積を拡大した。このような連結は各所で行われ、上下流だけでない格子型の水利ネットワークを形成した。その後も、戦後において、国家プロジェクトにより水利ネットワークは拡充し、登録施設では現在979haの田畑に水を供給している。登録施設を含む大井川用水は、2006年に国の「疏水百選」に選定された。



十内坳(地下水路)
(掛川市指定文化財)

百姓伝記→
(内閣文庫蔵)



江戸期の嶺田用水管理図 (嶺田区文書)



加茂用水 龍樋
(菊川市教育委員会蔵)



連珠式ため池 奥山下池・中池・上池



小笠地域
かんがい用水群
(静岡県)